

〔翻刻〕 永祿九年閏八月十八日肥後天草住妙楽寺秀舜興行何路百韻

青木美穂

永祿九年閏八月十八日肥後天草住妙楽寺秀舜興行何路百韻は国立公文書館内閣文庫蔵『百韻連歌集』（請求番号二〇二—〇二五二）に収められている。

木藤才藏氏の「連歌史年表」（『連歌史論考 下 増補改訂版』明治書院）が記すように、永祿九年（一五六六）閏八月十八日に肥後天草妙楽寺住の秀舜が、京都にて興行したものである。ちなみに『国書総目録』『国書人名辞典』では、「何路百韻」となっているが、これは誤りで「何路百韻」を採るべきであろう。現在のところ本百韻の諸本としては、内閣文庫本以外にも七本の存在が知られており（『連歌総目録』）、妙楽寺秀舜興行とするものと、紹巴の独吟として伝えられるものとの二系統に分かれる。前者には内閣文庫本のほかに、天理大学付属図書館本があり、後者の系統には、大阪天満宮本ほかがある。ただし、本来、紹巴独吟であったものが、伝来の過程で、一般に無名の秀舜興行と誤られる可能性は低く、秀舜他の面々が同座した一座というのが、本来の姿と判断した。また、『日本歴史地名大系 熊本』（平凡社）にある「妙楽寺跡」の項目には、「永祿九年

連歌師秀舜が上津浦氏を頼って来住し、里村紹巴らの連歌師たちを交え連歌の会を催している。肥後国天草郡妙楽寺住秀舜興行何路百韻（国立公文書館蔵）が残る」との記述があるが、奥田勲氏の「紹巴年譜稿四」（『宇都宮大学教育学部紀要』二三卷一号）、『言継卿記』（続群書類従完成会）を元に紹巴の足跡をたどれば、この時期の紹巴は京都にいたことが分かり、秀舜の方が上京して会を催したということがふさわしい。また「連歌師秀舜」という紹介であるが、「妙楽寺住」という記述から秀舜が僧侶であることは十分に推測でき、連歌の専門作者である「連歌師」という断定は避けるべきだと考える。

参会者は紹巴を始めとして、秀舜、弥阿上人、清誉、玄哉、心前、能哲、英怙、道成、宗仍、長知、康清、文阿の十三人であり、『連歌総目録』（明治書院）によると、天正年間から天正年間に連歌界で活躍した人物も多く含まれている。特に紹巴は、織豊期の代表的連歌師である。出自については諸説が存在するが、連歌の名門里村家を継承し、山科言継・三条西公条らの公家や、明智光秀・細川藤孝ら

京都近住の武将や多くの地方武将との交流も盛んで、京都連歌壇の第一人者となった人物である。秀舜については、本百韻以外にも慶長六年（一六〇一）二月二十五日の世吉の連衆にその名前が見えるものの、同一人物との確証はない。それ故この資料以外で詳細を知ることが出来なかったが、紹巴、紹巴の弟子である心前や、英怙、清誉など中央でも著名な連歌師達と、天草に縁ある人物が交わって連歌会を催していることは、連歌の地方への波及と、地方での享受度の高さを示している。

天草に妙楽寺が存在したことは、人吉市願成寺町の観音寺境内の観音堂にかけられている鰐口により分かっている。この鰐口の周縁には「奉施人肥州天草郡上津浦庄妙楽寺薬師如来御宝前文安五季戊辰三月日大施主上総介大蔵朝臣種和并万寿若丸敬白」と刻まれており、本来妙楽寺に奉納されたものを、当時上津浦に進駐した相良の兵が、引出物か戦利品の形で持ち去ったのだろうと言われている（『有明町史』有明町刊）。

妙楽寺は、現在の天草市有明町上津浦にあった上津浦城の付近に存在したとされるが、現在は跡もなく長閑な風景が広がるばかりである。ただし、この資料が存在することによって、この妙楽寺が確かに存在したということの証明の一端を担い、現在までその存在は語り継がれている。ま

たこの時期には、九州出身の人物が上京し、中央で連歌会を催している例が他にも見られ、地方連歌、特に九州地方の連歌享受層が厚かったことを示す一資料ともなっている。

さて、以下、翻刻に当たっては、適宜濁点を加え、虫損等により判読不能の文字は□で示し、その右横に推測される文字を付した。尚、翻刻末尾にある句上げの数と実際の句数とは、違う点があるが、ここでは原本に忠実に翻刻した。



（写真…上 上津浦城跡付近にある五輪の塔 下 妙楽寺跡周辺風景）

最後に、快く翻刻の御許可をくださった国立公文書館に謝辞を述べたい。尚、翻刻は、熊本県立大学後援会主催の

自主研究推進助成事業の一環として発足した研究グループ
(青木を含め日本語日本文学科の有志二十三名) によるも
のである。

永祿九年閏八月十八日

肥後天草住妙楽寺秀舜興行

何路

朝霧に松風おもきひゞき哉

梢をつたふあきの山水

河上の月の夜寒を鶯鳴て

床は旅寝のさめやすき空

問よりも出ぬ斗の宿毎に

夕くのかねのはるけさ

霜や猶あらしの末にまよふらん

木の間の嶺の冬枯の色

紹巴

秀舜

弥阿上人

清誉

玄哉

心前

能哲

英怙

幽にも鳥のこゑする入日影
 舟さし帰る波の一かた
 半天はたゞよふ雲に雨みえて
 袂涼しき夕暮の露
 待としもなくてや月の出ぬらん
 こすのまがひにかよふ稻妻
 ほのめかす風冷しき音添て
 色付らしも小山田の原
 今をわが折しら雲の初雁に
 おもふ都とながめやる暮
 隠家をとほるゝ程はなぐさめて
 此比つもる雪のした道
 ちる花に野べの草ばも浅緑
 梅がゝになる水の方く

道成 宗仍 長知 康清 文阿 巴 舜 阿 誉 哉 前 成 怙 哲

谷河の水いくせに流るらん
 外山にうつる朝日閑けし
 夜雨みるが内より晴初て
 何をさはりに問もござらん
 哀とやさけしもゆるす親心
 緑の袖もたゞしばしこそ
 霜拂草の枕の明離
 分つゝゆかん野ぢの案原
 遠くなる鈴をさしはの音す也
 片山陰のふかき夕霧
 月代もそれとばかりの嶺高み
 漸はた近し秋のはの色
 蝉の羽のうすき衣に風立て
 くるしむ思ひいかにつゝまん

仍 知 清 誉 巴 前 阿 舜 哉 怙 哲 巴 成 阿

文はたゞ筆限ある心しれ
 とりなすにこそけはひよからめ
 つかへこし人をぞ頼む新参
 道はそこともわかぬ神がき
 杉むらも松もひとつの雪折に
 ねぐらさだめぬ月のよ鴉
 秋風もふくろふの鳴日は暮て
 霧はさびしき故宮の庭
 爰かしこ雫落そふ岩傳
 すゑくも猶水の萍
 咲かくす柳は花の白波に
 みだるゝ玉や春雨の露
 跡はたゞこてふをもとの主にて
 うき住るとや帰る鳥のね

前 誉 怙 巴 清 知 哲 誉 舜 阿 仍 巴 哉 前

ともなふも語残して明るよに
 おも影したふ夢のあやなざ
 袖のかの消えぬ限をすさびにて
 さりしをいへば遠き法師
 行ひもたゞ一夏の住所
 汲たえぬとや水さびるにけり
 しほがまはいつの都の跡ならん
 かたぶきながら松の木高さ
 山の端にみるく月は明初て
 また秋きてもよはのみじかさ
 さ衣や取出てうちも重まし
 露より霜の置まさる暮
 啼もたゞよはく成行虫のこゑ
 冬の、薄風も待あへぬ

哉 阿 成 巴 誉 哉 前 仍 巴 怙 阿 舜 知 哲

山もとの畑焼煙むすば、れ
 春の雨まや程なかるらん
 時鳥き、しにもせん弥生（原カ）□
 影のどかなる月のあかつき
 人は皆とまらぬ花にやどかりて
 さめてぞ酔のなさけをばしる
 はげしくも山下風の吹送り
 遠方になる一むらの雲
 しづが住前田のいなは刈渡し
 うかぶ小舟は秋の河波
 こよひをや星の契も頼らし
 待ふかしたる袖の露けさ
 うかる、も忍かねての閨のとに
 征来（マ）にならす笛竹のこゑ

誉 巴 哲 怙 前 哉 舜 阿 巴 哲 誉 仍 前 成

鹿子住山はしげみのおくふかみ
 わかばや秋のもみぢともみん
 五月雨も時雨めきつ、晴曇
 雪より出る富士河の水
（原カ）□渡る野風もたゆむ日の光
 しばしは虫ぞ衰をはなれし
（うカ）□ら枯のま菅むら／＼方寄て
 根も臥柳ちり残るみゆ
 古跡は霧の笹のたえ／＼に
 月影さびし遣水のすゑ
 明ぬやと水鶏鳴よはさそはれて
（るカ）く□、程ときすきて行こゑ
 いく度かうたふ樵夫の休むらん
 重（な）る方の岩高き道

阿 前 怙 巴 哲 誉 舜 阿 清 知 仍 哉 巴 怙